

地域と協同の研究センター NEWS

2026 年 2 月 25 日発行
258 号

協同がひろがるまちづくり 第 22 回東海交流フォーラムを 2 月 14 日（土）に開催しました、楽しい一日を速報でお知らせします

「私たちから、つながりをひろげて、地域をかえる」をテーマに掲げ、少子高齢化がすすむ地域社会において、いかにして新しい協同の形を見出し、持続可能なまちづくりをすすめるかを模索する場として、一人ひとりが主人公として考えられるように開催しました。特に、従来の行政や家族による支え（家族資源）だけでは限界がある中で、地域住民や団体、企業が連携して生み出す「地域資源」が重要だと感じる場となりました。

地域の主役は小さな「おたがいさま」



森代表理事からは、地域を支える根幹は「小さな協同」にあり、生協や行政の枠をこえ、多様な人々が手を取り合い、事例を共有することで、少子高齢化の中でも誰もが「安心して暮らし続けられる持続可能なまち」を自分たちの手でつくろうと呼びかけが挨拶の中でありました。

かけられました。

尾張：ニュータウンを支える住民のおたがいさま



高齢化が進む高蔵寺ニュータウンでは、生協の店舗を拠点とした「美老（みろ）の会」などの居場所づくりや、有償ボランティアによる「くらしすけあいの会」が活動しています。介護保険では対応しきれない単発の困りごと（通院介助や大掃除など）を住民同士が支え合うことで、孤独・孤立を防ぐプラットフォームを構築しています。

岐阜：IT 業界から農業へ「生きるための生命活動」 としての養鶏

若手移住者による「生命活動としての農業」として、東京の IT 業界から移住した中村夫妻は、自然卵養鶏を営んでいます。彼らにとって農業は単なる「稼ぐための手段」ではなく、食の安全や土との関わりを通じた「生きるための生命活動」そのものです。地域のライスセンターや豆腐店から出たものを鶏の餌にするなど、外部に依存しない地域内循環を実現しています。土から離れた現代社会の中で、小さな循環、自分のできる範囲でいいので生活の本質を少し考えてほしいと呼び



地域包括支援センターの三浦センター長からは行政だけでは対応しきれない地域の課題を補完し、孤独や孤立を防ぐプラットフォームになっているとのコメントがありました。

常任理事の小木曾先生は支え合う農業、地域資源などをキーワードにコメントしました。



3月の日程など

3 日（火）	協同組合等研究組織交流会	14 日（土）	三河地域懇談会 学習・交流会②	
5 日（木）	岐阜地域懇談会世話人会	22 日（日）	多文化社会と協同組合懇談会	
6 日（金）	協同の未来塾第 8 回	23 日（月）	常任理事会	
7 日（土）	東海交流フォーラム実行委員会、第 3 回理事会	25 日（水）	三重地域懇談会世話人会	
9 日（月）	三河地域懇談会世話人会、生協の（未来の）あり方研究会	28 日（土）	友愛協同セミナー	
13 日（金）	くらしと平和・憲法を守る実行委員会	30 日（月）	尾張地域懇談会世話人会	
目次	協同がひろがるまちづくり 第 22 回東海交流フォーラムを 2 月 14 日に開催しました 私たちの「らしさ」を未来へつなぐために ～ICA「協同組合のアイデンティティ」協議草案 2 へ、意見を提出しました～	1	第 15 回 難民食料支援学び語り合う会を開催して 情報クラブ	5 6
		3	書籍紹介 不屈のひと 物語「女工哀史」	8
訃報	地域と協同の研究センター顧問中嶋好夫様が、1 月 7 日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。7 ページに訃報を掲載いたしました。			

お昼の交流タイムは「にぎやか」な場となりました。



やなマルシェの松山さんによるリフレッシュ体操やじゃんけん大会は発表報告が続く中で集中をときほぐしなごやかでにぎやかな場をつくってくれました。

交流タイムはにぎやかなブースで、やなマルシェの小物やシフォンケーキ販売、沖縄特別企画報告会のご案内がにぎわっていました。書籍コーナーの安藤信雄先生の「基礎経営学」、向井清史先生の「新しい市民協働を拓く」の本も完売でした。



三河：食と農がつなぐ「粋な老い支度」



中島さん（右の写真）は定年退職後、「えぎね協同ファーム」で有機農業に取り組んでいます。土に触れ、仲間と共に野菜を育てることは、健康維持だけでなく、成長を見守る喜び（元気の源）を生み出しています。これは個人の「老い支度」を地域全体の活動へと広げた事例です。農業を通じて多世代が交流し、見守り合う地域の形として示されました。

三重：移動販売車が運ぶ「買い物以上の価値」

松阪市を中心に運行されるコープみえの移動販売車は、単なる物資の供給に留まらず、利用者の安否確認や、停留所での住民交流の場を創出しています。買い物という日常の行為を通じて、顕在化しにくい生活課題を拾い上げ、行政や社協へつなぐ役割を果たしています。



実際に利用する高齢者からは「車に乗れない時が来る、続けてほしい」という切実な声、「みんなの顔

が見られて嬉しい」といった声が出されています。地域の安心を支える大きな柱となっています。

午後の分散会では「地域資源ってなに」をテーマに話し合いました



九鬼さんがすすめ方を説明し、グループごとに事例報告で感じたこと、自分の地域の「資源」について話し合いました。私の時間は、集中して話を聞いて、もっと広がる、もっといい方向に行くための応援のコメントがたくさん出されていました。



総括：手段から目的への転換

まとめにあたってJCAの前田さんからコメントをもらいました。フォーラムのまとめは向井清史先生です。これらの活動の本質は「行為の目的化」にあると指摘されました。農業や協同活動を、単にお金を得たり便利さを追求したりするための「手段」にするのではなく、その活動自体を自分の生活の充実や「生きること」そのもの、つまり「目的」に据え直すことが、豊かな地域社会を築く鍵となります。こうした小さな協同の積み重ねが、地域を再生させる大きな力（地域資源）となっていくのです。



春日さん、村松さん
過密スケジュールの司会進行お疲れさまでした。

（文責 駒井義明）



私たちの「らしさ」を未来へつなぐために ～ICA「協同組合のアイデンティティ」協議草案2へ、意見を提出しました～

2025 年 11 月 25 日、地域と協同の研究センターは、国際協同組合同盟（ICA）に対し、協同組合の定義や原則（アイデンティティ）の協議草案 2 に関する意見書を提出しました。「アイデンティティの改定」と聞くと、直接には関係ない話のように思えるかもしれませんが、しかし、これからの 30 年、協同組合が活動する際の「羅針盤」を決めるとても重要な話し合いです。現場の声として何を世界に伝えたのか、そのポイントを報告します。

1. 意見提出までの道のり

今回の改定議論は、2021 年の ICA ソウル大会から始まりました。世界中で「これからの協同組合はどうあるべきか」問い直される中、当センターでは、これをチャンスと捉えました。

2022 年から、「平和のために何ができるか」「職員の働きがいとは何か」といったテーマで「協同組合の役割に関するセミナーを重ねました。日々の業務に関わる職員や、地域で暮らす組合員、連携する NPO の方々の声を大切にするためです。

2024 年 3 月に最初の意見を出し、その後 ICA から示された新しい「協議草案 2」を見て、さらに議論を深めました。2025 年 10 月には集中的な検討会を行い、意見書が完成しました。これは、足掛け 4 年にわたる東海地域の現場での「実践と対話」が詰まったメッセージです。

2. 私たちの声が届いた！ 歓迎したいポイント

嬉しかったのは、ICA から示された「協議草案 2」に、私たちが以前から主張していたことがいくつか盛り込まれたことです。

①「持続可能性への価値」が加わった

協同組合が大切にする「価値」の中に、「将来世代の守り手として、社会的・環境的責任を果たす」という言葉が入りました。気候変動などが心配される今、子どもたちの未来を守ることも協同組合の大事な役目だと認められたのです。

②「平和な未来」という言葉が入った

第 7 原則（地域社会への関与）の目標として、「平和で公正、持続可能な未来」が明記されました。争いの絶えない世界情勢の中で、協同組合が「平和を求める組織」であることがはっきり示されたのは大きな前進です。

③「誰も排除しない」姿勢

第 1 原則（組合員資格）の説明で、「いかなる差別もなく」開かれていることが強調されました。包摂性、多様性を認め合い、誰も置き去りにしないという姿勢は、私たちの活動の根幹です。

④「相互扶助」の重視

第 3 原則に「相互扶助を高める」を加えることを提案しました。協議草案 2 では、価値に「mutual self-help」が加わりました。

3. 「ここは譲れない」見直し協議として、引き続き求めたこと

一方で、私たちの願いがまだ十分に反映されていない部分もあります。日本の協同組合の現場感覚からすると、「ここはどうしても入れてほしい」というポイントが 3 つあります。これらは今回の意見書で強く要望しました。

(1) 職員は「雇われる人」ではなく「パートナー」

こだわりの一つは「職員」の位置付けです。1995 年に改定された現行の原則には、職員の役割があまり書かれていません。「協議草案 2」では第 5 原則（教育）の中で少し触れられましたが、私たちはもっと明確に位置づけるべきだと考えています。日本の生協や農協は組織が大きく、日々の活動を支えているのは職員です。職員が「協同組合で働く人」として扱われるのではなく、組合員と一緒に悩み、地域をつなぐ「パートナー（協同をともに担う者）」として輝いてこそ、組織は元気になります。職員の役割をはっきり書くことは、協同組合がこれからも民主的であるために不可欠です。

(2) 「市民との協働」で地域を守る

二つ目は「他の団体との連携」です。人口減少が進む地域では、協同組合だけで解決できない課題が増えています。NPO や地域住民、さらには自治体とも手を組み、協働して地域全体の幸せ（公共的利益）を実現していかなければ、協同組合自身も生き残れません。「自分たちの利益」だけでなく「地域みんなの利益」のために市民と協力する。市民協働の視点を原則にもっと反映させてほしいと伝えました。

(3) 「利用」こそが参加の入り口

三つ目は、組合員の関わり方（参加）です。「参加」として、運営に関わり意見を出すことは基本ですが、「買い物やサービスを利用することそのものも重要です毎日の買い物＝「利用」をとおして、商品への意見やリクエストをすることは「参加」の第一歩です。「利用」を通じて組合員としての自覚が育っていく、「利用即参加」というリアリズムを大切にしてほしいと訴えました。

4. あえて「他人への配慮」という価値にこだわる理由

今回、私たちが特に重視して意見をだしたポイントがあります。それは「協議草案 2」で協同組合が大切にしている倫理的価値から削除された「他人への配慮（Caring for others）」という言葉の復活です。「協議草案 2」では、この言葉が削除され、「連帯（Solidarity）」という言葉に一本化されました。「連帯には、配慮がふくまれる」という説明です。私たちは、それは違うと意見を提出しました。「連帯」は、自立した強い個人同士が横につながるイメージです。でも、今の社会には、生活の困窮や孤独で声を上げることができない人たちがたくさんいます。お互いが、そうした弱い立場に気づき、寄り添う優しさ（配慮）があつて初めて、本当の「連帯」が生まれるのではないのでしょうか。「配慮」という人間らしい温かみのある言葉を、効率重視の時代だからこそ消してはいけないと主張しました。

5. 理想の旗を降ろさない

もう一つ、第 2 原則（民主的管理）の表現についても意見しました。「協議草案 2」では、大規模な組織の実態に合わせて、組合員の関わり方を「投票権や発言権を持つ」というハードルの低い表現に変えようとしています。確かに、全員が経営に参加するのは難しいかもしれませんが、しかし、原則とは「現状の追認」ではなく、「こうありたい」という理想（規範）を示すものです。「組合員が意思決定のプロセスに参加する」ことを明示することは、協同組合の基本思想を示すことであり、維持すべきであると伝えました。

また、提出した意見について「協同組合のアイデンティティ（定義・原則・原則）」本文に反映できなかったとしても、その解説書である「ガイダンスノート」の中に書き込まれるよう、要望しました。

6. これからの私たちにできること

JCA によれば、「協議草案 2」に対して世界各国・地域・個人から約 40 の意見が出されており、ICA はそれをうけて「協議草案 3」をまとめ、さらに検討に付すということです。2027 年に予定される次期 ICA 大会を経て、ICA 総会で決定される予定です。地域と協同の研究センターとして、「協議草案 3」についても、紹介し検討する機会を設けます。

今回の議論を通じて改めて感じたのは「協同組合とは何か」を問い続ける（考え続ける）ことの大切さです。「組織が大きくなっても、一人ひとりの顔が見える関係をどう作るか」「協同すること自体を、地域の社会的資源としてどう活かすか」「協同組合ならではの価値をどう測るか」～これらは、私たちの毎日の活動の意味そのものです。会員の皆さんも、それぞれの職場や地域で、「私たちにとってのアイデンティティ（協同組合らしさ）」って何だろう？と話題にしてみてください。学習会や話し合いのサポートの要望があればお寄せください。

（文責：NPO 地域と協同の研究センター

事務局 向井 忍）

第 15 回 難民食料支援学び語り合う会を開催して

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

2026 年 2 月 23 日、第 15 回 難民食料支援学び語り合う会を開催しました。今回のテーマは「次世代へと広がる支援の輪、難民の皆さんとともに歩む未来」です。

世界中で戦争や内戦、迫害が絶えない中、日本、そして私たちの身近な地域にも、命を守るために母国を追われた方々が暮らしています。難民食料支援の活動では、食料支援と並行して、地域住民との学びと交流を重ねる場として回を重ね、今回で 15 回目を迎えました。

桃の節句を通じた日本文化の紹介

今回の開催は 3 月 3 日の「桃の節句」を間近に控えていたことから、日本の伝統行事を紹介する機会ともなりました。会場の入り口にはお雛様の飾りを用意し、スライド資料にもお雛様の写真を取り入れて、難民の方々へその由来を説明しました。桃の節句が「女の子の健やかな成長を願う日」であることを通じ、平和への願いを共有しました。

12 時からの交流会で提供されたメニューも、この行事にちなんだものです。炊き立てのご飯で用意したちらし寿司と、温かいたまごスープを用意しました。どちらもコープ商品で、ムスリムの方たちにも配慮した食材です。ちらし寿司の準備は、参加者皆で食器を運び、配膳をしました。難民の方たちも、海苔やでんぶをかけて日本の味を体験する場面もあり、食事を囲む時間は、自然な笑顔が溢れるなごやかな場となりました。

世代と国境を超えた 30 名の交流

今回の集いには、名古屋会場（コープあいち生活文化会館）、豊橋会場（豊橋生協会館）、そしてオンラインを繋いだハイブリッド形式で、全体で 30 名の方にご参加いただきました。特に豊橋会場には桜丘高校の生徒と先生を含む 13 名が集まり、活気ある交流が行われました。

これまでの活動を振り返ると、当初はボランティアの授業を履修する学生たちのメッセージカードを通じた交流から始まりましたが、今では毎回多くの高校生や大学生が参加し、今回も、若い世代が難民の方々と同じテーブルを囲み、真剣に耳を傾ける姿が印象的でした。

桜丘高校の生徒たちが繋ぐ「共感の輪」

豊橋会場に参加した桜丘高校の生徒の皆さんからは、学校での平和活動や、昨年夏に難民シンポジウムに参加した経験が共有されました。彼女たちは、そこで得た気づきをもとに、所属

する演劇部で難民をテーマにした朗読劇を創作しました。昨年 11 月には本山の生協会館でその上演を行いました。本日、名古屋会場に参加して



豊橋会場（豊橋生協会館）

いた難民の方からは、「朗読劇に参加したその時間は、自分たちの思いが共有された、嬉しかった」という、その時の率直な感動が伝えられました。高校生の表現活動が、難民の方々との確かな心の交流を生んでいることが確認された瞬間でした。

継続する大学生ボランティアと新たな挑戦

また、名古屋会場では、名城大学で「ボランティア入門」の講義を受けたことをきっかけに、この難民食料支援に継続して参加している学生も発言しました。さらに、昨年 7 月に発足した NPO 法人 U CRANE の学生理事の方からは、「同法人は当初、ウクライナ避難民の支援を中心に活動してきましたが、今後はその枠を広げ、地域で暮らすすべての多文化背景を持つ人々を対象とした活動を展開していく」と、今後の展望についての言葉がありました。若い世代が自ら組織を立ち上げ、地域の課題に主体的に取り組む姿勢は、大きな希望であると感じます。

次回開催のお知らせ：6 月 14 日は PLAT へ

今回の振り返りでは、「英語や多言語で直接対話したい」「もっと実情を知りたい、学びたい」といった声も出されました。また、会場では食料品（お米、乾麺、缶詰、ビスケットなど）や現金の寄付も寄せられ、これらは責任を持って必要な方々へお届けします。この歩みを止めることなく、次回は初夏に開催いたします。

日時：2026 年 6 月 14 日（日）10:00～13:00

場所：PLAT（穂の国とよはし芸術劇場）研修室大および名古屋会場（コープあいち生活文化会館）

次回の発送作業は 7 月 5 日を予定しています。ぜひ、この輪に加わってみませんか。

（かんだ すみれ）

情報クリップ



生活協同組合研究 2026.2 VOL. 601

超高齢社会において生協が果たすべき役割を考える

公益財団法人 生協総合研究所 2026 年 2 月 B5 判 80 頁 定価 550 円 (消費税込)

巻頭言

協同組合の「点」 神野直彦

特集 超高齢社会において生協が果たすべき役割を考える

開会挨拶 中嶋康博

趣旨説明 (解題) 西尾 由

超高齢社会の進展とシニアビジネスの要諦 村田裕之

超高齢社会を機会と捉えて 矢尾板俊平

買い物難民を救え！移動スーパー「とくし丸」 住友達也

シニア世代が 50%を超えた生協組合員 宮崎達郎

コープさっぽろの移動販売事業について 外川雅喜

福井県民生協の「くらしのサポート」

ーゆりかごから墓場までを実践ー 中川政弘

閉会挨拶 和田寿昭

■IYC2025 の機会に協同組合の価値を再考する (第 11 回) 組合員の参加が明らかにする日本の塩分摂取の状況

ー日本医療福祉生活協同組合連合会 「24 時間蓄尿塩分調査」よりー 宮崎達郎

■国際協同組合運動史 (第 47 回) 1980 年第 27 回 ICA モスクワ大会②

ー日本のかわり、Dr レイドローとコメントー 鈴木 岳

■本誌特集を読んで (2025・12) 中村年春・天野晴子

■新刊紹介

川口かすみ著 『ジェンダーの視点で学ぶ憲法入門』 三浦一浩

●公開研究会

「生協総研賞・第 22 回助成事業論文報告会」 (3/19)

文化連情報 2026.2-3 No. 575

被災者の手による地域の回復

日本文化厚生農業協同組合連合会 2026 年 2 月 B5 判 72 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 *注

農協組合長インタビュー (111) ひろしま農協

職員 2700 人で築く新生 JA ひろしま 田中義彦

2024 年度文化連単協決算分析

食と農、地域のくらしの基盤を支える取り組みに活路を

西出健史

第 26 回厚生連医療経営を考える研究会

診療報酬改定、医療 DX、原価計算

医療の質と生産性向上を考える

小林美亜 森實雅司 高瀬浩造

考論 災害と地域づくり (5) 最終回

被災者の手による地域の回復 山下祐介

フードインセキュリティからみた

日本の食料農業政策 磯田 宏

医療機関における原価計算 (中)

医療機関におけるコスト構造と原価計算の方法

高瀬浩造

アフガニスタンが直面する環境破壊と人道危機

レシヤード カレッド

二木教授の医療時評 (240)

医療・リハビリテーション職に必要な医療経済・政策学の視点と基礎知識

ー効果的・効率的で公平な医療・リハビリテーションのために 二木 立

農高生と地域をつくる

～我はいかにして農業高校教員となりしか～ (13)

「全国農業博物館・資料館ガイド」を刊行する①

橋本 智

多様な福祉レジームと海外人材 (89)

海外に移住する労働者は誰が守るのか

安里和晃

デンマーク & 世界の地域居住 (198)

モンテッソーリケアを基盤に支援を提供する

「株式会社おひさま」(大阪府豊中市) 松岡洋子

◆第 2 回厚生連診療情報分析報告会

(on-line 開催) のご案内

◆介護報酬臨時改定および介護テクノロジー活用セミナー

(第 34 回 農協福祉研究会) のご案内

□自著を語る

どうする中山間地直接支払い制度 迷走から未来へ

橋口卓也

▶線路は続く (201) 汽笛が誘う函館本線“山線”

西出健史

▶最近見た映画

おくびょう鳥が歌うほうへ

／ 菅原育子

生協運営資料 2026.1 No. 346

つながる力で未来をつくる

～協同組合・行政・諸団体と連携し社会的課題に挑む生協～

日本生活協同組合連合会 2026 年 1 月 B5 判 52 頁 880 円 (消費税込・送料別)

巻頭インタビュー

●私たちの生協のこれから

事業と活動の両面で組合員のくらしに寄り添い

「つながる力で未来をつくる」

日本生協連●代表理事会長 新井ちとせ氏

特集 つながる力で未来をつくる

～協同組合・行政・諸団体と連携し

社会的課題に挑む生協～

1 協同組合間協同で法人を設立し

食の支援をとおして大阪の地域課題に挑む

一般社団法人なにわフードバンクしっかり食べや

●理事長 松浦賢司氏

2 フードバンク活動から始まり

多様に広がった就学援助世帯への支援

NPO 法人フードバンクしまねあったか元気便

●事務局長 大木理之氏

生協しまね●常務理事 玉置悟郎氏

組織運営部 つながり応援チーム リーダー

新井 徹氏

3 自治体との協同で実現した買い物支援事業への参加

おかやまコープ●代表理事 専務理事 徳山雅昭氏

連載

●全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ

第 54 回

「4勤3休」就労制度導入の成果と今後の展開

コープみらい

●コープデリ連合会

コープみらい宅配運営部 千葉エリア次長 古川浩二氏

コープデリ連合会

コープみらい宅配運営部 千葉エリア第 2 地区長

蛭田由隆氏

コープデリ北総センター センター長 横山篤史氏

コープデリ北総センター 地域担当 清水佑人氏

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(*)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

※『CO・OP navi』、からデジタル、そして note へ

長らく紙媒体で発行されてきました『CO・OP navi』は、2025 年 12 月号をもって紙での発行を終了し、デジタル版へ完全移行することになりました。そのメリットの一つとして、より多くの人たちに届けられるよう note で発信されています。この 1 月から「プレオープン」し、デジタル版への移行作業を進めていくということです。右の二次元コードから「プレオープン」の『CO・OP navi』を見ることができますので御覧ください。



中嶋好夫顧問のご逝去について

去る 2026 年 1 月 7 日に顧問の中嶋好夫様のご逝去されました。中嶋様は、愛知県の農業協同組合運動の発展に尽力されてきました。東知多農協の常務理事を務められた折り、旧めいきん生協との連携を積極的にすすめられました。めいきん生協と東知多農協との連携の歴史については、研究センター発行の増刊「地域と協同」No.12 号「創立 25 周年・NPO 法人化 20 周年特集」の田辺準也さんとの対談記事に詳しく掲載しています。



中嶋様は、地域と協同の研究センター設立の時から運営委員として当センターの運営にご尽力いただきました。2000 年度 NPO 法人化の際理事に就任され、2001 年度からは顧問として長きにわたり研究センターにご指導いただきました。



あらためて感謝申し上げます、ご冥福をお祈り申し上げます。

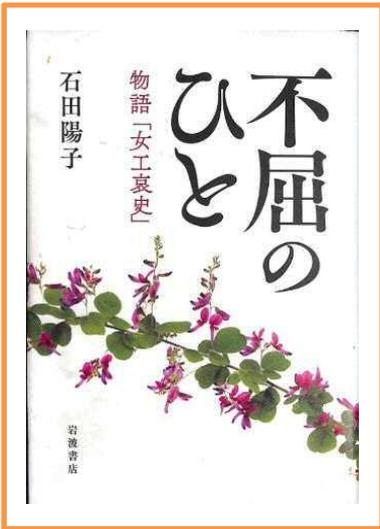
地域と協同の研究センター

対談記事は上記二次元コードからお読みいただけます

書籍紹介

地域と協同の研究センター 熊崎 辰広 会員からの書籍紹介
不屈のひと 物語「女工哀史」

著者：石田陽子 出版社：岩波書店 発行日：2025 年 6 月
 価格：2,420 円（消費税込）



紡績工場で働く女性たちを描いた「女工哀史」で知られる細井和喜蔵（1897～1925）の文学碑が、彼の出身地である京都府与謝野町で昨年 11 月に建てられました。その「女工哀史」の執筆を、1 人の女工が支えています。本名堀としを（1902～1983）、細井が 1925 年に亡くなつてのち、労働運動で知り合った高井と結婚し 5 人のこどもを育てています。

この本はその高井としをを対象とし、物語風に彼女の生涯を描かれています。その底本となったのが高井としをの「わたしの『女工哀史』」（岩波文庫）です。これは 1970 年代聖徳短期大学「現代女性研究会」が直接高井としををから聞き書きしたものが基になっています。そのメンバーには県内の紡績工場働く女子大生がいました。高井としをは、岐阜県揖斐郡久瀬村（現揖斐川町）で生まれ、10 歳で親元から離れ繊維工場の女工として働き始めます。和喜蔵も 13 歳で近くのちりめん工場で働き始めました。

その後 15 年間大阪や東京の繊維工場働いています。紡織機械工でした。1921 年東京モスリン亀戸工場働いていた堀としをを細井と出会い、失業中の細井を支え「女工哀史」の執筆を手伝います。完成したのは 1925 年（大正 14 年）でしたが、執筆の無理からか、細井はその年に亡くなります。

その後高井信太郎と出会い、1927 年には兵庫県にある賀川豊彦の自宅に夫婦で住み込み、2 年ほど家政婦として働いています。高井としをの不屈性は、例えば戦後の混乱のなかで、闇市では、知り合いの村の屠殺場から仕入れてきた臓物やたばこを売ることで 5 人の子供を育てあげています。またニコヨンと呼ばれる日雇いの仕事でも、仲間とともに労働組合をつくり、日雇い健康保険を勝ち取るのです。細井とは正式な結婚ではなかったことから、「女工哀史」の印税は彼女に与えられず、貧困との闘いの日々でした。それでも不正を許さず、権利を主張することができたのは、早くから労働運動を学び、また細井との出会いが原点になっていたように思えます。暗い時代に、懸命に生きた高井としををから学ぶことは多いのではないのでしょうか。

研究センター2月活動の報告

- 7 日（土）第 22 回東海交流フォーラム打合せ会
- 13 日（金）社会的援護研究会
- 14 日（土）第 22 回東海交流フォーラム
- 18 日（水）常任理事会
- 19 日（木）組合員理事ゼミナール第 9 回
- 21 日（土）沖縄戦跡巡り報告会
- 25 日（水）三河地域懇談会世話人会
- 28 日（土）生協職員マイスターコース第 7 回・修了式

※企画は様々な事情で中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。
 参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターの情報
 下記二次元コードからご覧ください。
 ホームページ



facebook



インスタグラム

